＜３＞本校が目指す理解力と表現力の育成

１.「読む」ことで理解したことを「書く」ことで表現する

本校では～ことばを豊かに適切にとらえる国語科指導のあり方～を研究のサブテーマに据えて、子ども達の＜読む＞力を伸長させようと研修を行ってきた。

その中で、やはり「理解と表現は表裏一体である。」ということを実感した。学習指導の中で培われた個々の理解力を指導者である教師は、正確なデータをもとに評価しなければならない。また、子ども自身にとっても学習することで身につけた己の力の程度を知り、活用することができなければ、国語は目標の定まらない「なんだか分からないけど１時間過ぎた。」という学習に陥ってしまうだろう。子ども達の学習意欲は目標を達成することで更に高まっていくものでありそのためには、明らかに「～がわかった。」「～をすることができた」という証拠を残すことが必要なのである。理解力は「表現」というステージに立ったとき、初めてその姿を現すと考えていいだろう。

以上のような理由から「読む」力を高めるための研究に加えて、その手段として＜表現＞「書く」力の育成をも図っていくことになった。

２．理解、表現する上で土台となる能力

文章を理解するためには、第一に読めなければならない。「書く」という表現方法をとる場合にも書き方が分からなければどうしようもないだろう。国語科研究に取り組んだ当初から、音読指導を重要視してきたが、読んだり書いたりするには土台となる力が必要である。言語事項について徹底した指導をすることで、文章を「理解」「表現」する際のスタートラインに子ども達を立たせることができる。教科書では「ことばの学習」が記載されているが、その時だけの学習にならないよう常に意識的に授業の中に取り入れていきたい。以下、「読むこと」「書くこと」における確実に身に付けさせたい基礎的な能力を羅列してみた。

○「読む」「書く」活動の上で必要な基礎的な力

１・２年	読むこと	・姿勢や口の開け方に気をつけてはっきりした声で読むことができる。 ・文章を声に出してすらすら読むことができる。 ・句読点で区切りながら読むことができる。 ・既習の漢字を読むことができる。 ・地の文と会話文の区別をつけて読むことができる。 ・主語、述語を文から見つけられる。
	書くこと	・平仮名、片仮名を書くことができる。 ・前学年までに学習した漢字を書くことができ、文中で使うことができる。 ・長音、拗音、促音、撥音を書くことができる。 ・助詞「は」「へ」「を」を間違えずに書くことができる。 ・「　　」の使い方が分かり、文中で使うことができる。 ・主語と述語で構成された文を書くことができる。
３・４年	読むこと	・お話の内容が分かるように声に出してすらすら読むことができる。 ・既習の漢字を読むことができる。 ・形式段落の分け方が分かる。 ・文章の中から接続語を見つけたり、その役割がわかる。 ・「こそあど」の使い方が分かる。 ・文末表現に気をつけて読むことができる。
		・前学年までに学習した漢字を書くことができ、文中で使うことができる。

	書くこと	・句読点を文中で適切に打つことができる。 ・段落の始めや会話の部分など必要に応じて改行して書ける。 ・修飾と被修飾の関係が分かり、文中に生かすことができる。 ・「そして」（順接）や「でも」（逆接）などの接続詞を使って文章が書ける。
5・6年	読むこと	・話の内容に合わせて工夫した音読ができる。 ・場に応じて音読、黙読、微音読ができる。 ・既習の漢字を読むことができる。 ・易しい文語調の文章をすらすら読むことができる。 ・接続語の使い方が分かる。 ・事実と意見を区別しながら読むことができる。
	書くこと	・前学年までに学習した漢字を書くことができ、文中で使うことができる。 ・名詞、動詞、様子を表す言葉の意味が分かり、文中で生かすことができる。 ・主語、述語の関係をきちんとおさえた文を書くことができる。 ・既習した優れた表現を自分の文章表現に生かすことができる。

３．文章を的確に読み取るための学習指導

・叙述に即して内容を正確に読み取る。
・既習して得た知識や他者と意見交流する中で得た知識と結びつけて自分なりの文章解釈をする。
・文章表現の効果を他作品と比較するなどして検討・評価する。

「読解力」とはどのような力なのかを考えた時、上記の３点にまとめることができるのではないだろうか。読解というと、文章や作品の内容をただ正確に読み取ることに専念しがちである。しかし、それだけで終わらず補足、批評、検討、鑑賞といった様々な思考過程を経て、その文章や作品に対する自分なりの考えを持つところまで到達しなければ真の読解力を身に付けたとはいえない。読解力とは、その文章と向き合うことで今までの自分自身の思考を更に深め広げることのできる能力と考える。

だが、まずは文章を正しく捉える技能がなければ、独りよがりの思いつきや誤った方向の文章解釈に陥ってしまう恐れがある。そこで「文章を的確に読み取る」ために身に付けさせたい力とそれを身に付けさせるための方法を日常の学習活動と照らし合わせて記してみた。雑駁ではあるが。個々の実態、学級の学習学習状況に合わせて指導の工夫を図ってほしい。

＜１．２年＞

（１）場面の様子をとらえるために、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読む能力を身に付けさせたい。

↓

・登場人物の行動を順序に沿って書き出す。
・挿し絵をもとに想像する。
・登場人物の様子や気持ちについて想像したことを吹き出しに書く。
・互いの発表を聞きながら、更に自分の想像を広げ意見交流する。
・登場人物に手紙を書く等いろいろな形で自分の感想を表現する。
・劇や紙芝居などで想像した内容を加えながら表現する。

（２）事柄の順序に沿って内容の大体を読む能力を身に付けさせたい。

↓

・時間を表す言葉や簡単な接続語の意味を知り、文中から見つける。
・「はじめに」「つぎに」「おしまいに」何があったかを見つける。
・主語と述語を見つける。主語がない時は何が主語か考える。
・文中に何度も出てくる言葉を見つける。
・大事な言葉を使ってお話を一言でまとめる。
・写真や図、挿し絵と文章をつなげて考える。
・様子と理由が書かれているところを区別して見つける。
・時間を表す言葉や本文の文体を使って簡単な説明的文章を書く。

（３）物語や科学的な読み物など、様々なジャンルの本に親しもうとする態度を身に付けさせたい。

↓

・図書室に行く機会を多く持つ。
・読み聞かせを聞いたり、本を読む中で生じた感想を書いたり、簡単な紹介文を書く。
・お話クイズ大会など読書を生かし楽しむ場を設定する。

＜３．４年＞

（１）目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読む能力を身に付けさせたい。

↓

・キーワード、キーセンテンスを基に段落の内容の大体をつかむ。
・問いかけの文と答えの文を見つける。
・説明文の中での文の役割をつかむ。
・文末表現から文の役割を知り、文章構成を考える。
・文末表現に気をつけながら事実と意見を区別する。
・接続詞の役割を知る。
・文末表現に気をつけて自ら説明的文章を書く。

（２）場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて叙述を基に想像して読む能力を身に付けさせたい。

↓

・登場人物の気持ちを表す語や文を見つけ、言葉から想像を広げ、気持ちの変化、情景などを自分なりの表現で書く。
・登場人物同士の関係を見つける。
・登場人物の行動や考え方から学んだことを書く。
・互いに発表し合うことで一人一人の感じ方の違いに気付き、更に理解を深めるとともに優れた表現を自分の文章に生かす。

（３）目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読む能力を身に付けさせたい。

↓

・必要な語句を見つけ、それを生かしながら読み取ったことを短い文や文章にまとめる。
・段落の要点を小見出しなどにまとめる。
・こそあど言葉の指している語句や文を見つける。
・お話の起承転結をつかむ。
・必要なところは細部の表現に気を付けて書き込みをしながら読む。

（４）目的に応じていろいろな本や文章を選んで読む習慣を付けさせたい。

↓

・国語科のみでなく、様々な教科、領域で図書資料を活用し、その手法を自らの説明的文章や発表等に生かす。

＜５．６年＞

（１）目的に応じて、文章の内容を的確におさえ要旨をとらえたり、事実と感想、意見などの関係をおさえ、自分の考えを明確にしながら読む能力を身に付けさせたい。

↓

・接続時を手がかりに文章の内容をつかむ。
・要旨が書かれている段落を見つける。
・主述をはっきりさせながら接続語を使って要旨を文章にする。
・事実と意見を区別するために文末表現に注意して読む
・「始め」（問題提示）、「中」（事例、説明、答え）、「終わり」（筆者の考え）に文章全体を分ける。
・事実、意見、感想が書かれている段落同士の関係をつかむ。
・体言止めの形で小見出しをつける。
・小見出しを基に文章全体の構造図を作る。
・筆者の考えを的確につかみ、それに対する自分の考えを持つ。
・課題や事実、事象、結論、筆者の考え方という文章構成を基に、自分が疑問に思っていることについて説明的文章を書く。

（２）登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめる能力を身に付けさせたい。

↓

・情景描写されているところを見つけ、様子を想像するとともに自分なりの表現で話したり書いたりする。
・情景描写から登場人物の心情や心の変化を想像して書く。
・登場人物の関係や心情の変化を図などで書き表す。
・登場人物の行動や生き方、考え方から学んだことをまとめる。

（3）本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりさせたい。

↓

・本を読んで分かったことを推薦文の形で書いたり、新聞記事にして書き、互いに発表交流し合う。
・友達の発表で良いところを見つけるとともに修正加筆する部分については助言し合う。

４．説明的文章における具体的な学習指導内容

何を目標にして国語の勉強をしていくのかと考えてみたとき、言語事項に記載されているものであれば、人と話したりものを書いたり、また本を読んだりする上で必要だと納得できる。では、物語的文章や説明的文章はなぜ学習するのか。それは生活を心地よく支え、豊かにするためととらえていいだろう。例えば、説明的文章は家庭電化製品に必ず付いてくるし、料理等趣味の本にも多数記されている。、どの家庭にも引き出し一つ分ほどあるだろう。取扱説明書を正確に読むか読まないかで、その製品自体の機能を有効に活用できるか決まると思えば、読めなければもったいないのである。せっかくの製品の力を生活に生かせないのである。物語的文章はどうなのか。よく「登場人物の気持ちになって考えよう。」と発問するが、実際素晴らしい答え方をする子が日常、相手の気持ちを分かってあげようとする子とは限らない。これは国語科が道徳ではないことを表している。国語科では行動が伴わなくても考えようとする点が大切なのである。自分ならどうするだろうと想像したり、表現の優れた文章を読んでいいなあと思う心を持つことが、心の引き出しを増やすということになるだろう。そして、読むだけではなく自分も書いてみたいと欲するような学習指導を進めることができるなら、国語科の学習は生涯学習としてりっぱに役目を果たすことになる。勿論、様々な物語を読み登場人物の心情や行動に影響を受け、その結果相手の気持ちを慮るといった道徳的な行動をとるようになれば、それは更に素晴しいことと言えるだろう。

さて、本校では説明的文章を取り上げて研究してきたが、その中で「理解する」力を単に「本文が分かる」だけでなく、学習して身に付けたことを自在に「使え」たり、他の人に「教え」たりできる力ということまで広げて捉えている。そのような能力を定着させるために実際どんな学習活動を子ども達にさせていけばいいのかを成長過程に沿って考えてみた。身に付けたい力を「文章の形態が分かる（形態）」「文章を要約したり要旨をまとめることができる（要約、要旨）」「文中の資料を活用することができる（資料活用）」「文章の構成が分かる（構成）」「自分の考えを持つことができる（自分の考え）」「身に付けた力を活用できる（活用）」の６項目に分けて表にしてみた。子どもの学習活動が高まる過程で不足、修正する項目や内容が出てくると思われるが、一つの目安として学習指導の参考にしてもらえば良しと考えている。

項目	児　童　の　学　習　活　動	低	中	高
形態	１．本文をすらすら読む。	○	○	○
	２．本文を視写、または部分視写する。	○	○	○
	３．既習の文体を使って説明する文章を書く。	○	○	
	４．本文を事柄の順序に従って箇条書きにする。		○	○

	５．説明書（箇条書き）を説明文に書き換える。			○
要約・要旨	６．文中に何度も出てくる言葉を見つける。	○	○	○
	７．主語と述語を見つける。	○	○	○
	８．キーワード、キーセンテンスを見つける。		○	○
	９．形式段落を要約する。		○	○
	10．意味段落ごとに小見出しを付ける。		○	○
	11．本文を読んで要約文を書く。			○
	12．本文の表現を関連した別の言葉に置き換える。		○	○
	13．本文の要旨をまとめる。			○
資料の活用	14．写真や図を本文と結びつける。	○	○	○
	15．調べたりインタビューしたことを簡単なメモにまとめる。	○	○	
	16．調べたりインタビューしたことを適切な言葉でメモにまとめる。			○
構成	17．問題の文と答えの文を見つける。	○		
	18．課題（問題）とまとめの部分を見つける。		○	○
	19．どのように課題（問題）解決しているか、準備、方法、手順などをつかむ。		○	○
	20．接続詞を見つけ、使い方を知る。	○	○	
	21．接続詞を基に、文章や段落がどのようにつながっているかを考える。		○	○
	22．文末表現の違いに着目し、事実、意見、筆者の考えを区別する。		○	○
	23．小見出しを基に構造図を作る。		○	○
	24．説明的文章の段落構成をつかむ。		○	○
自分の考え	25．本文を読んで分かったことや感想を書く。	○	○	○
	26．自分の考えを持って友達と意見交流する。	○	○	○
	27．筆者の考えの部分を見つけ、それに対する自分の考えを書く。			○

	28. お話の核となる筆者の考えをまとめ、それに対する自分の考えを書く。			○
活用	29. 読み取ったことを基にクイズを作る。	○		
	30. 文章構成を考えながら論説文を書く。			○
	31. 理科の観察や実験方法と結果、社会では表やグラフから分かること、算数では式の説明など発表する内容を説明文に書く。		○	○

５、説明的文章読解における事前指導

今まで日常の国語科学習で身につけさせたい事項について列挙してきたが、実際に教材文と向き合った際、事前指導が十分なされていないと学習に困難を生じる場合がある。学習効果は積み重ねの上に成り立ち、その積み重ねが多いほど子どもの学力向上につながっていく。

教材に入る前に、教師は子ども達の「読む」力の定着度を確認し、その度合いによって指導に力を入れていくべき点を明らかにしていく必要がある。不足の部分については、時には事前に練習問題として前学年の教材等を利用して説明的文章の学習方法を想起させてから本教材に取り組ませてもいいだろう。算数科のレディネスと同じ発想である。また、他教科においても文や文章を意識させて読ませることも効果的である。算数科や理科は、その構成において説明的文章の最も簡略化した形といえる。もちろん指導目標は違うが、他教科他領域との結びつきが強い国語科だからこそ、さまざまな場面で「読む」力の定着を図っていきたい。

このように事前指導をすることで、子ども自身が先に身につけた力を本教材で発揮しようとする意欲を高め、更に次の段階に進ませることができるのではないだろうか。

（１） 学年別事前指導事項

低学年	・文の最後には「。」が必ずつくこと。その文がいくつか集まると文章になること。 ・時間や順序を表す言葉には「はじめに」「つぎに」「おしまいに」「一つめは」「まず」「やがて」「そして」「こうして」などがあること。 ・文には「頭」（主語）、「足」（述語）があること。 ・言葉や文をつなげる言葉があること。（～と～、～したり～、～しながら等） ・質問や答えの文があること。（文末表現に注意させる。） ・形式段落は一マス下がっていること。意味段落は文と文の間があいていること。 （意味段落のまとまりについては徐々に指導していく。）
中学年	・キーワード、キーセンテンスの見つけ方にはコツがあること。 ・文末表現に注意すると、問いや答え、事実や意見の違いなど文の役割が分かること。 ・接続詞の役割と使い方を知ること。 ・小見出しの付け方は短く体言止めにすること。 ・こそあど言葉が指している語句や文の見つけ方を知ること。 ・効果的なメモのとり方を知ること。（理解したことを「話す」ときに必要。）
高学年	・説明的文章の構成型を知る。（序論、本論、結論） ・要旨のつかみ方、書き方を身につける。 ・序論と結論が適切につながっているか調べる姿勢を身につける。 ・自分の考えを書き表す方法を知る。（文章や図表等、場に応じて使い分ける。）

（２）指導実践から

○文章構成を知る

「はじめ、中、終わり」、「課題提示、説明、まとめ」、「序論、本論、結論」という構成を知る

「はじめ」…課題提示、問題提起、話題提示など

「中」　…観察、実験、例示などを使った説明、理由づけ

「終わり」…課題の答え、文章のまとめ、筆者の考え、新たな課題の紹介など

○キーワード、キーセンテンスの見つけ方を知る。

・文末が「でしょうか。」（問題提起）や「のです。」（答え）の文をさがす。
・形式段落の始めと終わりの文に注意する。
・一つの段落の中に回数が多く出てくる言葉をさがす。→段落内の主語になる場合が多い。
・前の段落に出てこない言葉をさがす。→新しい話題に移る。
・「つまり」「このように」「したがって」等の接続詞がついた文に注意する。
・文末が「なのです。」は筆者の考えが強く出ている文なので注意する。
・実験や観察の文章の場合は結果が出ている文をさがす。

○段落のまとめ方を知る。

・キーワード、キーセンテンスを使って、大事なところを落とさないようにしながら短文にする。（ノート１，２行、～字以内等の制約有）
・文にするとき、自分なりの言葉で語句をつなげたり適切な言葉に置き換えて書く。
・各形式段落ごとのまとめを読み返し､題名との関連や文どうしのつながりがあるか確認する。
・小見出しは教材の題名を生かしながら短く体言止めにする。
・大段落をまとめるときは筆者の考えが書かれている段落を見つける。

○筆者の考えに対する自分の考えの書き方を知る。

・筆者の考えに対する自分の考え（賛成か反対か）を明らかにし、その理由を書く。
・筆者の考えに対して「本当にそうなのか」という見方で検討してみる。その際、今までの経験や社会事象などをもとに考えてみることも必要。

理論研究でさまざまな資料を読むことが多いが、現実の子ども達と向き合ったとき、そこから得た知識が必ずしも効果的な指導として結びつくことはそれほど多くない。それは子ども達一人一人が皆違うからである。学習能力、学習意欲、既習事項の定着度、生活環境まで学力の形成に大きな相違を生じさせる。

そこで必要なのは、やはり実践であろう。理論研究したことを実際やってみると思った通りになかなか進まない。子どもの学習実態を知り、その子に合わせた指導方法を検討し再び実践してみる。その繰り返しが経験となり学習指導に生きてくると考える。

本校では「読む」領域について過去３年間取り組んできた。その過程で理解力がどの程度身についたかを評価する上で表現力も必要と考え、「書く」領域についても同様に研究を継続してきた。しかし、飛躍的に子ども達の「読む」力が向上したとはいえない。地道に一歩ずつ進んでいるという感である。研究仮説や指導方法についても今後見直しが必要なのかもしれない。それだけ理解力を高めるためには長期にわたる研究実践の時間を要する。

それでも、今までの研究成果がいつか子ども達に「生きて働く国語力」となり、生活に役立ったり、うるおいを与えるものとなってくれればと願いつつこれからも学習指導について研究を深めていきたい。